



新聞畫會

第廿八号

藤左衛門文婦まで  
大坂よりの帰路

明治八年三月十日  
越前と近江の境なる  
木の峠の麓まで  
二人の死骸あり是ハ  
雪隠れよて死せし  
其人ハ越中の國  
高岡阪下町の  
富家村田



九化略記附傳

かゝり災ひの逢ひ  
と我此雪ぢふれと  
山の雪春の陽  
氣にて山の肌と  
雪と離れ切れる  
時ぢばれか  
ハ忽ち落る  
其雪大盤石  
の如くま  
おろく者必ず  
助かるを得ずと  
北陸旅行の人の  
用心あり

東京日々  
九百七十三号 抜翠

新報

小倉